

## デイケンズと公開朗読

文字を声にのせて読む、すなわち（朗読）の歴史は古い。十九世紀前半の女優シドンス夫人や、ファニー・ケンブルによる朗読を近代の例とするならば、古く中世にあつては、チョーサーやラングランドの自作朗読があり、さらに国境を越えてギリシャの昔にまで遡るなら、ホーマーの詩の朗読はもとより屋外競技場におけるヘロドトスの自作朗読の例もある。後にデイケンズの公開朗読実録を刊行したチャールズ・ケントが記すように、「朗読は文学のはじまりと同様に古い」。

読み手がいて聴き手がいるという朗読の基本構造には、文字の読める者（または上手に読める者）が、文学の読めない者に代つて読むという、役割分化の意味が含まれているはずである。

十九世紀英国の識字率を調べてみると、一八四〇年の「戸籍本署第二年報」によれば、男性六十七パーセント、女性五十一パーセントとあり、次いで一八五一年の調査では、男が七十パーセント弱、女が五十五パーセント足らずと、わずかな向上が見られるだけであ

る。その後、世紀末へむかうにつれ、識字率は着々と伸びてゆくが、この推移にはもちろん公教育制度の確立や、機会均等の原則なども作用していたにちがいない。そして、それと同時に、文字や書物に寄せる人びとの意識もまた変化していったことは言うまでもない。

十九世紀半ばから、ミューディ（一八四二年創業）やW・H・スミス（一八五八年創業）、その他各地の貸本屋が盛況であったから、本は借りて読むこともできたが、文字の読めない者は、どうしても他人に読んでもらうほかなかった。デイケンズの小説には、『荒涼館』のクルックや、『大いなる遺産』のジョー・ガージャリや、ろくに文学の読めない人物が少なくないが、なかでも『我らが共通の友』のボッフィンなどは、義足の文学者ことサイラス・ウェッグに謝金まで支払いながら本を読んでもらっている。朗読の源流は、やはりどこかで、読書を求めたり求められたりという、需要・供給の原理と密接につながっていたようだ。

それからもう一つ、わけでもヴィクトリア朝時代にあつては、個

人で黙読するよりも、他人といっしょに読書を楽しむという様式が一般に浸透していた。書物をとおして人びと相互の交わりが、日々の楽しみがあった。家庭の団樂として朗読が行われたり、親が子に本を読んでやったり、酒場では新聞を朗読する雇いの読み手などもあって、この種の娯樂的一面もまた朗読にはつきものであった。

十九世紀の五〇年代になると、格安朗読の企てが、まずスタッフォード州の町に興り、それがみるみる拡がって、六〇年代にはこの大衆娯樂の様式が当時の流行と化した。この朗読は町や村の集会場や学校などを借りて催されたことから、また入場料が一ペニーと安かったことから、まさしく庶民のための娯樂であり、日々の潤いであり、ときに道徳的指針をひそめた“安全な”氣晴らしであったことが、おのずからうかがえる。一方では演劇が、何かと危険な、ふしだらな、悪徳の温床としてけむたがられた時代だけに、それとは別種の大衆娯樂として、ペニー朗読が人びとにひろく歓迎されたのも不思議はない。

当時の『タイムズ』紙（一八六八年）は次のように報じている。  
 「読み手には事欠かない。どんな学校でも、年間の予定のなかに必ずやお楽しみイベントを掲げて、凡庸な戯曲や詩の何がしかを、内外の名だたる人士に“読んで”もらっている。そうでもしなければ、後れをとってしまうらしい。また貧者のささやかな娯樂のためにも、今や教区の教場を借りてのペニー朗読は、法衣を着て興味津津たる面もちの牧師らまでが、みなこれを奨励しているありさまな

のだ」

デイケンズは早くから自作の朗読に強い関心を抱いていたが、公開朗読なる新しい試みに踏み切ったのは一八五三年のことで、先述のペニー朗読が盛況へむかう時流にほぼ添うかたちになる。ペニー朗読が町の集会所や学校などの“演壇”を用いたところに、劇場の興業とは本質的に異なる性格があり、演劇と朗読を区別してかかったデイケンズとしても、この“演壇”にはどこまでも固執したかった。マルコム・アンドルーズの炯眼によれば、ここにデイケンズが一貫して訴えつづけた大衆のための「情操教育的」ねらいがあったという。<sup>(3)</sup>ただの氣晴らし、憂さ晴らしのための本読みではなかったということになる。

デイケンズが自作の公開朗読に教育の意味合いを強く意識していたことは、まず時代状況から推して想像にかたくない。夙にカーライルは『英雄崇拜論』（一八四一年）をかざして講演の巨星と仰がれ、宗教の分野ではニューマンが、また美術から社会批評へと転じたラスキンは『胡麻と百合』（一八六五年）の講演をもって、巷間の注目を集めていた。デイケンズと同業のサッカレイや、少し古いところでコールリッジ、ハズリットなども折々の講演に会場を沸かせたが、聴衆はいずれも演壇から投げかけられる啓蒙の声に聞き入ったのである。デイケンズがこの時代の空気を鋭敏に嗅ぎとらなかつたはずはない。ただしデイケンズの演壇への関心は、講演よりも朗読にあった。

ディケンズの莫逆の友であり、文学上の良き助言者でもあったジョン・フォスターは、公開朗読がごとき「低級藝」にうつつを抜かしではならぬ、むしろ作家としての「高級藝」に専念すべきだとして、ディケンズのこの新しい試みに猛反対を唱えた。フォスターが朗読をもって「低級」と称するのは、文字で完成された作品を音声化するところに、なにか安易な、卑しい、大衆迎合の臭いをかぎつけたためかもしれない。しかしディケンズはフォスターの助言を聞き入れなかった。親友の憂慮をとり越えて、自分の心をはげしく駆りたてるものがディケンズの側に厳然とあったらしく、たとえば一八五三年暮れに始まる慈善朗読に際しても、クリスマス物を読むということ、そして安価な入場料によって大勢の労働者を勧誘するというあたりに、むしろディケンズの真意が暗示されているように思われる。もっぱら大衆を喜ばせて我が意を得たりとする「低級藝」に墮すことなく、ディケンズはそこから飛翔して新しい道を、新しい可能性を切りひらこうと考えていたに相違ない。それが自分自身のためなのか、世のため他人のためなのか、あるいはその両方であったか、むろん速断するわけにはいかない。

一八五三年歳末のパーミンガム公演が、ディケンズの公開朗読の第一号であったわけだが、これに踏み切る決心をしたのは、その一年前にパーミンガムの「友人たち」の歓待を受けた直後のことであった。ディケンズはそのときの約束から、同年十二月二十九日の初日に「クリスマス・キャロル」、一日おいて「燠炉端のおろぎ」、そ

の翌日に再び「クリスマス・キャロル」を朗読した。この三日間で集めた客は六千人、収益金は地元教育機関(The Birmingham and Midland Institute)の基金に廻された。

聴衆の反応については、地元の記者がこう報じている。「その語りには一同みな魅了された。ディケンズ氏は口ひげをひねり、ペーパー・ナイフをもてあそび、本を手放して親しげに前方へ乗りだすかとみれば、朗読そのものを大そう楽しんでるように、目をしばたたいてみせるのだ」。また『パーミンガム・ジャーナル』誌によれば、「会場をぎっしりと埋めるのは労働者たちだが、一見したところ、まさかそうとは思えなかっただろう」。ディケンズが現れると、彼らはいっせいに「立上がり、どっと歓声を上げ、それもすぐ静まって、そしてまた歓声が上がった。……ディケンズが初めの一語を発すると、喝采の嵐が起こって、もう一度最初からやり直さねばならなかった。そうしてやっと、二、三行ばかり読みすすめることができたのだ」<sup>(3)</sup>。

「燠炉端のおろぎ」は『クリスマス物語集』<sup>クリスマス</sup>に収録された五作品のうち第三作目であるが、本が出版されたときの評判からすれば、この朗読は第一作目の「クリスマス・キャロル」の成功を凌ぐうかと期待された。ところが事實はそれほどでなく、以後ディケンズ自身の熱もさめて、この一作が読まれたのは、公開朗読総数の四百七十二回のうち、わずか四回を占めるにすぎなかった<sup>(3)</sup>。

公開朗読に寄せるディケンズ自身の感慨を彼の『書簡集』のなか

から、また世評のもろもろを新聞・雑誌の記事、その他から読みとってみると、事の外貌がおおよそ把握できそうである。

某論者によれば、ディケンズの朗読は「作中人物めいめいのちがいが、声音と身ぶりをもって一瞬のうちに色分けされている」といひ、あるいは「演じすぎるといふことがなく、ほどほどの暗示で止めている」、「声はがなり立てることなく」、「むやみに涙を誘発することもない」といふ。あるいはまた「手が頻繁に動いて物語の独得の意味を表出する」、「ディケンズは己の表情と声を一変させて他人になり変る」、「この魔法のごとき声の変化、まさに笑いも涙も思いのままに操るがごとし」といふ具合に、ディケンズの朗読藝に感嘆の意を表している例が多い。

しかしもちろん、ジョン・フォスターならずとも、作家が公開朗読ごとき横道にそれることを良しとしない評もあった。一八五八年十月の『ダービー・マーキュリー』紙の記事などは、その最たるものだろう。そこではディケンズの公開朗読が、「作家の社会的地位を貶める行為である」と断じられ、「ディケンズは商売に身を転じた」と舌鋒もなかなか鋭い。どこかジョン・フォスターの当初の見解に近いものを感じられるが、その頑迷なフォスターでさえ、後年にはディケンズの朗読を評価して、「ディケンズは小説ばかりか、その朗読によつても世に知られている」といふほどの容認の態度に傾いたのは注意してよい。

ディケンズは聴衆の反応をつぶさに観察して、臨機応変に台本の

そこかしこを加減し、アドリブをまじえ、各回の朗読にそのつど最善を尽くした。聴衆が泣いたり笑ったり、拍手喝采をしてくれるところに、ディケンズは自身の朗読の出来栄を計った。

人びとと直かに交わり、拍手と歓声の渦にのみこまれ、しばし我を忘れるという、この阿片のような陶醉こそが、その頃のディケンズに何よりも求められ、何よりも不足していたものではなかったか。その頃——ディケンズはときに四十代半ばにあり、永年苦業を共にしてきた妻キャサリンとの不和がますます深刻化していった。それに伴つて家庭内の分裂、友人や親戚との確執もまた深まった。

この前後の時期にもう一つ、ディケンズが身も心も奪われていた事から、すなわち素人演劇について触れておかなければならない。

ディケンズの青少年時代を叙する伝記の多くがしばしば注目する事項として、彼の芝居好き、演劇嗜好というものがある。そのなかで特筆すべき一件が、当時の人気役者チャールズ・マシューズの影響である。若きディケンズは、この喜劇役者に憧れた。マシューズのように台詞をばらまき、マシューズのように他の何者にでもなりおおせる役者になりたい、と考えた。作家として功なり名遂げたあとでさえも、ディケンズは生来の芝居好きをずっと保持し、地下に燃えるマグマは、とうとう一八四五年の素人劇団結成となつて地上に噴出したのである。ダグラス・ジュエルド、マーク・レモン、ジョン・フォスター、ヘンリー・メイヒュー、ジョン・リーチ、その他の友人を誘つて劇団をつくり、みずからその指揮をとつて、演出から

監督から、雑務全般に至るまでを一身に引き受けた。時間や労力を惜しむ気配など、さらさらなかった。文士の手すさびとはどうてい思えない。

初めに手がけたのはベン・ジョンソン作「十人十色」であったが、この芝居には貴頭の紳士、淑女までが来場して大成功を収めた。数年後にシェイクスピアの「ウィンザーの陽気な女房たち」を演じたときには、ハイマーケット劇場に女王ご夫妻の臨席までみて、これもまた大成功であった。

とにかくディケンズの熱の入れようが尋常ならず、一八五〇年代に入ると、ブルワー・リットンと共に「文藝互助協会」(The Guild for Literature and Art)を設立して、ロンドンおよび地方まわりの芝居公演にまで全力を傾けることとなった。みずからの住居タヴィストック邸には「世界一小さな劇場」をこしらえ、家族までも巻きこんで、ウィルキー・コリンズ作「灯台」(一八五五年)や「凍れる海」(一八五七年)の演出と演技に打ち込んだのである。<sup>10)</sup>

「凍れる海」はディケンズの熱演によって多くの観客の涙をしぼったが、一八五七年八月には、友人ダグラス・ジェロルドの追悼公演として、マンチェスターの大ホールでこれを演じる企画へと発展した。ここに登場するのが、この先ディケンズの影の生活に寄り添うことになる若い女優エレン・ターナンである。これはディケンズの死後六十五年たって、トマス・ライトが初めて公にした「文豪のスキャンダル」とも称すべき話になるが、残念ながら、ここでこの興

味ぶかい一件に深入りする余裕はない。<sup>11)</sup>

ディケンズは一八五三年の慈善朗読から、一八五八年四月にプロの読み手として立つまでに、約四年のあいだ十七回あるいは十八回の朗読を行った。<sup>12)</sup>この間には私生活の面での一大変化が、ギャズヒル・プレイス邸への移転、女優エレン・ターナンとの深い交際、日増しに険悪化する妻との関係(五八年五月に離別)等々が重なって、ディケンズの神経をことのほか疲弊させた。生活上のその負の一面を蹴って、再び活力をとり戻し、新しい道を模索するのに四年余りが費やされた、と捉えるならば、この時期におけるディケンズの心情も一種複雑な、また抜き差しならぬ意味あいをもって迫ってくるだろう。そんな彼の実生活のなかに、玄人はだしの演劇活動が、また慈善朗読が取り込まれていったのである。

慈善朗読をなす九年前、一八四四年十二月に、ディケンズはリンカンズ・イン・フィールドのフォスター宅に十名の知友を集めて自作「鐘の音」を朗読した。一八四六年九月には、ローザンヌにて『ドンビー父子』分冊の第一号を朗読した。人前で自作を朗読して聞かせる誇りと、歎びと、聴衆の拍手喝采にディケンズはいささか度を失い、興奮冷めやらぬ手紙をフォスター宛に書き送っている。その文中に、「……講演やら朗読の盛んな今どき、自作の公開朗読をなせば大金がころがり込みましようか」と記しているあたり、早くもこの頃から、ディケンズは公開朗読の産みなす莫大な収益に注目していたとも考えられる。

それから十有余年の歳月をふる間に、ディケンズは素人ながらも熱のこもった公開朗読を数度にわたって試み、場数をふむごとに自信をつけ、迷いもためらいも消えていったようだ。いよいよプロとしてロンドン公演に踏み切った初回の場に際して、ディケンズは聴衆の前にはっきりと意思を表明した。「私がこのたびの決意に至ったのは、私の生業からみじんも逸脱するものではないと考えたのみならず、次の三つの理由があつてのことです。その一つは、この朗読が文学の信用と独立をいささかも損うはずはなく、二つ目は、ひろく世に知られた人間と世の人びととが、互いに親しく睦まじく、直かに交わるのは良いことであつて……三つ目としては、大勢のみなさんとの個人的な友情とやらを持ちつづけることが……」<sup>(16)</sup>ディケンズのこの前向きの覚悟のなかに、人びととの交流が強調されているのは見逃せない。しかも作家と読者をつなぐ間接の交流ではなくて、「直かに交わる」という点が肝要なのである。先に一何よりも求められ、何よりも不足していた」と述べた事がらに、これはそのまま重なるだろう。

当初は、月に五、六回の朗読ペースであつたが、三ヶ月ほどして初めて地方巡業に出たときには、一八五八年の八月に二十四回、九月に二十五回、十月に二十三回、そして十一月に十一回と、驚くほどの活動ぶりを示している。もはやフォスターのたび重なる反対など歯牙にもかけぬ、揺るぎのないプロフェSSIONナルとして壇上に立つこととなつた。

公開朗読がもたらす痺れるような歓喜と、莫大な収益とは、嘗々と小説を書きつづけるそれまでのディケンズの生活に新しい局面を打ち開いてみせたことは疑いない。それと同時に、プロとしての意識が、人びとを喜ばせて金をいただくという姿勢が、あくまでも徹底していたことには驚かざるを得ない。朗読の一作ごとにリハーサルを二百回までくり返したなどは一種の伝説としても、台本をつくり、その改訂版をまたつくり、発声から表情、身ぶり手ぶりに至るまで丹念に吟味を尽くして朗読に臨んだことは、確かな証拠もあり証言もある。

収益については、一回の催しでさえ四十ポンドを超え、ひと月にすれば当初の一千ギニーから、後にはそれをさうに上まわつた。小説による年収が三千ポンドというから、それとこれとを比較すれば、いずれの道が収入面においてより効率がはいかは自明である。

しかしそれはそれとしながら、ディケンズは一方で、最後まで作家としての仕事から離れなかつた。片や公開朗読を死の三ヶ月前までやり通しながら、片や小説では、『二都物語』『大いなる遺産』『我らが共通の友』、その他連載物を書き、ついに『エドウィン・ロードの謎』を未完に残して他界した。それら小説執筆に打ち込むあいだは、公開朗読の興業もおのずと影をひそめていたのである。『二都物語』が週刊誌『一年中』に登場するのは一八五九年四月末日だが、この年の二月半ばをもって公開朗読は中断され、再開されるのが十月半ばである。これまでにはおそらく『二都物語』の最終

部（十一月末掲載）は書き終えられていたはずだ。『大いなる遺産』が同誌に掲載されたときでも、六〇年十二月から翌八月までのうち、途中数回の朗読をなしたばかりで、小説執筆のほうに力点が置かれていたことは明らかである。『我らが共通の友』と『エドウィン・ドルードの謎』に至っては、執筆期間中における朗読回数は皆無であった。何はともあれ本業は作家なのであって、小説の執筆こそが、ディケンズとしては疎かにできぬ本来の仕事であったと云うべきか。事実、彼はついにその本来の領分に帰っていったわけである。

また一方、小説を書くだけでは満足できない何かが、いつもディケンズの胸中にわだかまっていたことも事実であろう。さもなければ、時間と労力と執念をかけて、一連の公開朗読にあれだけの情熱をそそいだ実績が、どう説明されようか。ここで再びかつてのチャールズ・マシューズびいきに思いを馳せてみたい。マシューズの眼目とするところは、ワンマン・ショーであった。一人が何役もこなすしかも自由自在に、きわめて迅速に、一の役から他の役に変身してみせるのである。ディケンズはこれに瞠目した。それからもう一人、五〇年代のワンマン・ショーで大衆の人気をさらったアルバート・スミスが、ディケンズの野心と意欲を刺激したことはまず間違いない。公開朗読を開始するにあたって、ディケンズは彼に相談までもちかけている。公開朗読にワンマン・ショーのスタイルを持ち込むことは、それほど不自然ではなかったはずだ。そしてこれこそが、演劇とは一線を画すべき朗読固有の特質であった。

演劇では一人の役者がせいぜい二役か三役をこなすまでである。複数の役者の協力によって劇は仕上げられるわけであり、ワンマン・ショーとは、この点が大きく異なる。そして小説は、演劇からもワンマン・ショーからもはるかに遠い、一人だけの場所で作られている。これらそれぞれの情熱の分岐する地点にあって、ディケンズはときに一方に傾き、またときに他方へ傾いだようである。

もう少し彼の公開朗読の実態につくことにしよう。ここで台本の一件に触れておきたい。ディケンズは当初、クリスマス物で打って出ようと考えたわけだが、それはこれまでの朗読経験と聴衆の反応などから、いたって無理のない妥当な判断であったようだ。朗読用の台本としては、原作のページを切りとり、定型の紙面に貼り付けて綴じた冊子を用いた。壇上でページを繰りやすいようにとペーパー・ナイフを用意したものだから、朗読の初期の光景をとらえた写真などでは、大きなペーパー・ナイフが登場する。原文のところどころには朱を入れ、斧鉞を加えて、朗読むけに形をととのえた。

常に好評の「クリスマス・キャロル」などは、一八五三年の慈善朗読において三時間ものに仕つらえたのが、五七年のロンドン公演では二時間半に、そして五八年の地方巡業に際しては二時間ものまで圧縮された。その後「ピクウィック裁判」と抱きあわせて二時間二十分にまとめるという具合に、ますます縮められた。原文の簡潔化、明瞭化にむかって大胆な削除や省略がなされたわけだが、そうすることで失われる原文の持ち味も、むしろ少なくなかったはずだ。

しかしそこは朗読固有の武器たる声音、ジェスチャー、表情の妙などによって補われていたようである。結局、朗読台本は小説原作から一步また一步と、遠のいてゆく運命にあった。

原文を圧縮するといっても、ただ削るばかりではない。真に一個の朗読として成り立たしめるには、可笑し味を増幅させたり、息抜きのプロットを挿んだり、聴衆の理解を阻む語句や表現を改めたりと、さまざまに工夫を凝らす必要がある。そうして一つのまとまりと、話の筋のなめらかな展開を目ざさなければならぬ。

こうして新たに作成した台本を用意しながらも、実際の朗読に及べば、その場の雰囲気や気分や、折々のひらめきなどが働いて、台本どおりというわけにはゆかない。ディケンズの朗読にアドリブが頻繁であったという事実は、片手に台本を開きながら、朗読中いっさい台本に目をむけなかったという一事からしても容易にうなずけよう。一真の朗読はページから目を上げたときに始まる」とは、まさに云い得て妙である。

クリスマス物は朗読用として恰好の演目であったが、そうかといって、そればかり反復するわけにはいかなかった。ほかに長篇小説の一部なども切りとられ、改変されて、朗読のレパートリに加えられた。レパートリの選択と追加は、早くも一八五八年の夏から始まっていて、こんなところにも、朗読にかけるディケンズの意気込みのほどがうかがえる。その後もレパートリの充実化へむけての努力は止まず、一八五八年、六一年、六六年、六八年と、ディケンズは大

きな巡業をひかえてレパートリの選択にそのつど腐心した。

一八六一年の秋から冬の巡業で新しくレパートリに加えられた作品は、「デヴィッド・コバフィールド」、「ボブ・ソーヤー氏の宴会」、「ニコラス・ニクルビー」であるが、台本作りにあたって、わけでもディケンズが苦慮したのは「デヴィッド・コバフィールド」であった。長篇小説の一部を切りとって短時間の朗読用に当てようという場合、どこを切りとるかに加えて、切りとった部位が複数にわたれば、それらをどうつなぐかという困難な問題に遭遇する。「ピクウィク裁判」や「ボブ・ソーヤー氏の宴会」は原典に小さなメスを入れるだけでさしたる苦勞もなかったようだが、「デヴィッド・コバフィールド」、あるいはのちの「大いなる遺産」（未説）ともなれば、ディケンズの苦心惨憺の様子がおのずと察せられるのである。

「デヴィッド・コバフィールド」の朗読台本は六章に分れ、原作第三章からの短い抜粋に始まり、エミリとステイアフォースの駆落ちへ、またペゴティおじさんのエミリ搜索へと、原作の各所から小片を集めて筋が流れ、しまいに原作第五十五章、嵐のヤーマス海岸の場面に至って終る。そればかりか、六章中の二章までが、主筋とは別にデヴィッドの恋や、ドラとの結婚生活が語られ、そこには名物キャラクターのミコーバー氏なども登場して彩りを添えている。話の統一と多彩と、二つながら同時に達成させようという苦心の跡は随所に明らかだが、むしろこの「筋入りベーコン」は話の統一を阻害し、筋はこびをかえって無理なものにしてしまったとのきびしい評もあ



る。<sup>(17)</sup>

その後ディケンズは、一八六六年に「ドクター・マリゴールド」、六七年に「マグビー駅のボーイ」や「バーボックス商会」、六八年に「小人のチョップス」、そして六九年には「サイクスとナンシー」とレパトトリを増やし、総数十六作に及んだが、実はこれに加うるに、台本まで作っておきながら一度も朗読の実現をみなかった作品が五篇あった。

まず、「憑かれた男」がその一つである。一八五三年の慈善朗読の折、「クリスマス・キャロル」のほかに読む一篇として、この作か「鐘の音」を考えていた。ところが主催者側が「燬炉端のこおろぎ」を所望して、ディケンズはそれに同意したのであった。

「憑かれた男」の台本は、小説の各ページを切り貼りして八折版に綴じたものだが、フィリップ・コリンズによれば、赤や青インクの校訂の跡が第三章に入った所で中断され、手つかずのままの原文が五十ページほど残されているとの由である。レパトトリに加えるつもりで仕事を進めながら、ディケンズの気持は、なにか熟しきらないものを引きずっていたのかもしれない。荒井良雄氏は「ディケンズが得意とした演劇的なダイアローグを駆使したドラマティックな人物造形と写実的な情景描写よりも、詩的で幻想的な文章が多く、そのあたりに朗読台本に脚色しにくかった原因があるようだ」と指摘し、この作については「朗読効果に自信がなかったからだろう」とまとめている。<sup>(18)</sup>

「バステイーユの四人」は原作『二都物語』（一八五九年）の第一巻のみを摘みとって、朗読台本に仕立てられた。一八六一年夏にディケンズは四篇のレパトトリを用意したなかで、何が原因してか、ここではこの一篇だけが朗読されなかった。マイケル・スレイターはこの台本と小説原本との異同を一つ一つ押えながら、つぶさに検討して、台本作成の折のディケンズの苦心と技倆の冴えに思いを凝らしつつ、これが朗読に至らなかったことを遺憾としている。不採択の理由は推測に止まるが、とスレイター教授は前置きしながらも、この一篇には喜劇風味が欠けているせいか、と推断している。<sup>(19)</sup>

『二都物語』につづく『大いなる遺産』（一八六一年）では、ディケンズは野心的な構えをみせて、前作のように小説の一部を切り取るのではなくて、小説全体を通しての台本作成にとりかかった。これは方針の上で、先の「デヴィッド・コパフィールド」に連なるものだが、結果としては甚だ長い台本（百六十ページ）となって、ディケンズはこれをさらに縮小するまでもなく放棄した。

次の「リリパー夫人の下宿」にも、歩み半ばにして立止まるというがごとき、どこか熟しきらないディケンズの心情が揺れている。これは一八六三年『一年中』誌のクリスマス号に掲載されて大いに人気を博し、友人チャールズ・ケントの勧めもあって台本作成に踏み切ったものだが、結局、台本は校訂の跡を一つも残さずに打ち棄てられた。<sup>(20)</sup>

実を結ばなかった台本の最後の一篇として、『信号手』がある。

これはほぼ原作と変るところなく、校訂を進めた形跡もほとんどない。実際、改めて手を加えなくても筋や形のまとまった一作であるが、このセンセーショナルな陰々滅々たる話を取りあげるには、ディケンズの気持にまだためらいがあったものか。しかしこの頃にはもう、あの「サイクスとナンシー」の朗読に食指が動いていたのである。

ディケンズの朗読台本二十一篇を総覧すると、二つの大きな特徴が浮上する。「デヴィッド・コペフィールド」を境として、すべて前期の作品であることが一つ、それから、フィリップ・コリンズの指摘にもあるとおり、社会批判や時代諷刺の内容をことごとく除いているという点<sup>(一)</sup>が、二つ目の特色である。おそらく、聴衆が何を求めているか、何を好むかという、ディケンズにとってもっとも大切な点を考慮した結果であろう。ただし、一つの例外！「サイクスとナンシー」を除いて、と付け加えねばならないが、これについてはまた後で述べる。

ディケンズは台本をそっくり暗記するまで稽古を重ねていたから、わざわざ演壇に台本を持ち込む必要もなかったわけだが、しかしこれが〈朗読〉である以上、彼はあくまでもその基本様式に忠実であろうとした。二千人、またそれ以上の聴衆を集めながら、ディケンズは劇場よりも市民会館や公会堂を選んだというのも、朗読は演劇とちがって、親しい人たちの前でくつろぎながら本を読んであげる“もの”と考えたからだろう。この朗読の旧きスタイルを、ディケ

ンズは心にあたためながら壇上に立ち、八折版の台本を片手に開いて、その手を机上に設<sup>た</sup>えた台の上に軽くゆだねつつ、目は聴衆のほうへむけられたまま朗読がよどみなく進行してゆく、そんな具合であったろう。ダブリンの『フリーマンズ・ジャーナル』誌（一八六七年一月十二日）によれば、「ディケンズの朗読は出し物というよりも、むつまじい仲間たちが集う、打ちとけた語ういのよう」だとのことである。

もちろん、演劇的要素をふんだんに生かして聴衆を魅了したことは、先に示した幾つかの世評の伝えるとおりであり、晩年の「サイクスとナンシー」などでは、ディケンズは感極まって台本を抛りなげ、恐ろしい形相をつくって大音声をひびかせた。朗読はもはや単なるおとなしい本読みであるはずはなく、演劇の魔手に犯されまいとしながらも、おのずから演劇の域に引きずり込まれてしまうという、自ら制御しがたい分裂の相をあらわに見せているのだ。ディケンズの朗読はこの自己矛盾と云おうか、二種の欲望のせめぎ合いと云うべきか、意識と無意識のなかで交錯するアンビヴァレンスの上に座を占めていた。

それにせよ、二千人からの聴衆を相手に、マイクばかりか他の設備らしい設備もろくにない会場で、いったいどうやって朗読に迫力をもたせることができたのか。大勢の目と注意を一点に惹きつける、なにか秘術のようなものでもあったのか。実は、ここに幾つかディケンズの細やかな工夫があったのである。

音は部屋の要所ごとに布幕を張ることで、外へ逃がさず、ひびきをうまく集めるように考案された。頭上にはガスをパイプで導いたガス・ランプが煌々と輝き、読み手の顔をくまなく照らす。足もとから照らせば、顔面に影ができるから好ましくない。背後の壁には濃い臙脂色の布が垂らされて、読み手の姿がいっそう明るく浮き立つ仕掛けになっている。ディケンズが特別に詠えた朗読用の簡素な机も、臙脂色の布張りの部分をわずかに残して、あえて朗読者のかくれもない姿が聴衆の目に飛び込んでいくように作られていた。こうしてディケンズは聴衆の目と耳とを一点に、ほかならぬ読み手その人へと集中させるように、朗読の環境をととのえたのである。ディケンズはマチネを嫌い、夜と、人工の灯を求めたのも、闇にかこまれた光の効力に期するところ大であったがためである。

しかし一方、ディケンズのこの入念な準備と工夫をむざんに裏切るような事態もなかったわけではない。声がよく聞えないとして中入りで退出する客が続出して、その数「二百を超えた」と訴えているのは、ダンディの某新聞に寄せられた手紙である。同記事にあるように、会場の特等席に着いて、朗読だけに注目している批評家などには、まず知り得ない一片の真実と云えよう。

エムリン・ウィリアムズの指摘するように、文豪が公の場に顔を见せるなどはまだ珍しい時代であったことも忘れてはならない。ディケンズが壇上に登場しただけで、もう催眠術にかかったように、聴衆はこぞって耳目をそばだてたことだろう。ディケンズが読む作品

は、聴衆もすでにストーリーを熟知していたものが多かったので、朗読の声音は遠く彼らの耳もとまで「無理なく」届いたはずなのである。

また、レイマンド・フィッツサイモンズは云う。「朗読は感情的な催しもの」であって、「ディケンズは人びとにひろく愛された作家であったから、そのディケンズが壇上に現れたとなると、人びとは必ずや色めき立った」。そうして、フィッツサイモンズ流にひねって考えるならば、「朗読の成功がどれだけディケンズの演技力によるものか、またどれだけ聴衆自身によるものであったかわからない」とさえ云えるかもしれない。

ディケンズが二度目にアメリカへ渡ったのは、一度目の一八四二年から隔たること二十五年、すなわち一八六七年の十一月下旬であった。ふた昔前の軋轢もどこへやら、ディケンズはアメリカの人びとに絶大なる歓呼と迫手をもって迎えられ、十二月二日の初朗読（ボストン公演）からして切符は奪いあうほどの売行きを見せた。五日後の『ハーバース・ウィークリー』誌の記事によれば、ディケンズの朗読には貴賤を問わず関心が集まり、数日間のボストン公演において一万枚の切符を売り尽くしたとのことである。ディケンズを「ご主人様」と称んで随行したマネージャーのジョージ・ドルビーは、このアメリカ巡業についても、詳細な記録を残してディケンズ朗読の実態をありありと伝えてくれる。ドルビーの語るころでは、切符はダフ屋に買い占められたり、一人の客が何枚も買い込んだり

して、その対応に少なからず悩まされたという。厳冬のフィラデルフィアでディケンズは風邪をひいて苦しみ、不眠の夜を明かして、食事もろくに受付けぬまま予定の朗読をこなしたと、朗読の中休みには毎晩いつもの卯酒をおおって元氣をつけたこと、シカゴ、その他の西域へと旅するには体力が許さず、予定のキャンセルを余儀なくされたことなど、ドルビーは綿々と語っている。

六八年四月八日、ボストンでの「さよなら朗読」が終了したときの様子を、ドルビーはこんなふう<sup>(25)</sup>に記す。

「……それから拍手喝采の嵐がおこり、ディケンズ氏は再び壇上<sup>(26)</sup>に姿を見せた。その頬には涙が伝い、『さようなら』と彼は云うのだが、目に涙をためるばかりか、声までもが涙ぐんで次のように語るのだった。

『みなさん……かくもやさしく、あたたかくアメリカに迎えていただいたことは、私の記憶から消えようはずもなく、初日はここボストンに始まり、そして、この国を去るのも、ここボストンからであります。正直に申せば、今夜この瞬間に至るまで、ここを離れるという実感など微塵もありませんでした。われらの短い人生に、最後の仕事を終えるというのは、なんと悲しいことでしょう。ここでははっきり申し上げたい。私はほどなく自分の国へ、愛すべき母国へと氣持をさしむけることになりましょうが、そのときたちまちにして、この輝かしいホールも何もかもが、永久に私の眼前から消えてしまうことを思えば、ああ、実に悲しいかぎりです。……』<sup>(27)</sup>

およそ五ヶ月間にわたるアメリカ公演では、「クリスマス・キャロル」と「ピクウィク裁判」、「デヴィッド・コパフィールド」と「ボブ・ソーパー氏の宴会」、あるいは「ニコラス・ニクルビー」と「ひいらぎ亭の番頭」のごとき組合せで、これまで評判の良かった九篇を朗読して、その数七十六回に及んだ。しかしここに一つ珍しい話が残されている。ケイト・フィールドの記録によれば、ニューヨークでの最後の朗読（四月二十日）に、ディケンズは衰弱のあまり立つことができず、着席したまま「クリスマス・キャロル」と「ピクウィク裁判」を読んだそうなのである。あの周到なディケンズとしては、いささか不似合いの恰好であったにちがいない。

アメリカの朗読巡業は、企画の上でも収益面でもまず成功裡に終わったが、このあたりで満足して平穩な日々<sup>(28)</sup>に落着いていたならば、ディケンズ最晩年の、あの悲愴にして過激な企てなどもなかったことだろう。事実はその逆であった。ディケンズは要するに、一つの満足ではやまず、オリヴァの口からこぼれる「もっと欲しい」という、さらに先の満足を激しく求めたのである。

ここに今、新しい一篇「サイクスとナンシー」がディケンズのレパートリとして加わった。これはほかの演目がない危険を彼の名声にも、このところ衰弱ぎみの健康にも、負となるべき危険を抱えていて、ディケンズ自身これの朗読にはとりわけ慎重にならざるを得なかった。

ディケンズは『オリヴァ・トウイスト』のなからナンシー撲殺

のくだりを軸として台本をつくり、まずは試しに百人の知友を招いて朗読した。そうして諸氏の感想を訊ねたところが、これを公開朗読に用いることでは賛否が分かれた。そのあまりにも狂暴な殺害シーンが、これまで人びとのあいだに定着したディケンズの好印象を壊してしまうだろうとの否定的な意見があり、逆にまた、時代はもはやセンセーショナルな刺激を求めていると指摘する向きもあった。

友人のチャールズ・ケントは、撲殺のくだりで止めずに（当初の台本はこの場面で終わった）、サイクスの逃亡にまで話を引き延ばすべきだと提案した。そのほうが却って殺害の罪の恐怖が増すだろうということだが、ディケンズはしぶしぶながらこの提案を受け入れたという。聴衆の側に立って、その衝撃を最後に和らげてやるためなのだそうだが、しかしこのとき実際に、ディケンズはどれぐらい聴衆のことを念頭に置いていたものか。

ディケンズとしては、突き進むよりはかになかった。何かしら、凶暴な欲望が彼を動かしていたようだ。周囲の賛否の背景には、大衆の人気をさらったトマス・フッドのセンセーショナルな詩「ユージン・アラムの夢」の朗詠が、新しい試みの先例として意識されていたはずである。そんな時代の勢いもあってか、一八六九年一月初めに、「サイクスとナンシー」は公開朗読のレパートリに加えられ、不動の人気をほこる「クリスマス・キャロル」とはまるで別種の、狂おしい、魔的な力をもって聴衆の心を揺さぶった。しかしそれが、ディケンズ自身にとってどれほど重要な意味をもっていたら

うか。

六九年の地方巡業は、ベルファースト、ダブリン、クリフトン、チェルトナム、バース、レスター、エジンバラ、グラスゴー、マンチェスター、ハル、ヨーク、ケンブリッジ、パーミンガム、リヴァプール、リーズ、等々に及び、これらの合間をぬってロンドン公演がさらに加わった。かくもめまぐるしく、次から次へと各地の巡業をこなすうちに、ディケンズの疲労と衰弱は外目にもはっきりと現れてきた。側近のドルビーなどは、何にも増してディケンズの体調を憂えた。「サイクスとナンシー」の朗読は読み手に過重の負担を強いるものだから、この回数をなるべく少なくすること、収益よりも健康が大事であることをドルビーはあえて進言した。これが因で、「ご主人様」とマネージャーのあいだに一時険悪な空気が流れたものの、ついにディケンズが譲歩して、二人はすぐにまた友好関係をとり戻すというような顛末もあった。「ご主人様との交わり」のなかで、彼が他人に怒りをぶつけたのは、あとにも先にもこのとき一度だけであった。

それにしても、朗読巡業におけるディケンズの疲労は甚だしく、医者者のフランク・ピアードまでが駆けつけて、朗読の続行に警告の意を表わした。しかし事前にもう、切符はすべて売り尽くされてしまっているのだ。「大粒の涙がディケンズの頬を伝った。部屋を横ぎってこっちへ来るなり、私の頸に抱きついて『ああ、君、申し訳ない。さんざん苦勞かけるね。切符はみんな売れてしまって、

それにこの遅い時間だ。大勢のお客さんたちを、どうすればいいの  
だろう」<sup>(32)</sup>

これはプレストンでの出来事であったが、ドルビーはすぐにもディ  
ケンズをこの町から退却させて、自分はマネージャーとして客らの  
恕しを乞い、めいめいの切符の払い戻しに取りかかる段どりを決め  
た。

ほどなくして二名の医師（トマス・ワトソンおよびフランク・ビ  
アード）による有無を云わさぬ診断書が出された。「チャールズ・  
ディケンズ氏は、公開朗読と鉄道の長旅が頻繁であったため、心身  
ともに疲労困憊して体調芳しからず、下記連署にてこれを証す。当  
診断としては、ディケンズ氏はむこう数ヶ月のあいだ、朗読を再開  
するに無理なき状態であるとは考えられない」<sup>(33)</sup>

かくして、ディケンズはしばらく養生の日々を送る結果となった。  
遺言書を作ったのもこのときである。その後、危険を脱したという  
医師の診断があり、ロンドンにかぎって十二回の「さよなら朗読」  
が許可されることになったわけだが、この十二回のうち四回までも、  
「サイクスとナンシー」を扱んでいるのは注目してよい。ディケン  
ズはこの一篇を手放すことができなかった。なぜか、という疑問が  
残る。これの朗読は最後まで、ディケンズの健康を危険にさらしな  
がらも、ディケンズの心の奥にひろがる闇と、欲望と、生命の源に  
どこかでつながっていたように思われてならない。それはまた、ど  
ういうことなのか。台本のページの余白には、ところどころに

“action”——「ジェスチャーを」の演出メモが残されていて、ナン  
シー撲殺の山場にあつては、まぼろしの棍棒をふりおろす恐ろしい、  
あるいは歓びを隠したディケンズの狂おしい姿が目に見えかねるのであ  
る。まぼろしの棍棒は、富や名声や、拍手喝采の華やかな夢をディ  
ケンズに見させてくれながらも、一方では日常の喜びと、愛情と、  
家庭の小さな平和とを、こっぴみじんに破壊してしまつたのではな  
かつたか。

最終朗読は七〇年三月十五日、ロンドンのセント・ジェイムズ・  
ホールにて行われ、「クリスマス・キャロル」と「ピクウィク裁判」  
が有終の美を飾つた。「朗読がすみ、もっとも悲しい、そして（ディ  
ケンズ氏としては）もっとも忌むべき瞬間が訪れた」と、ドルビー  
は記している。ディケンズは割れんばかりの拍手を浴びて壇上に再  
登場し、満場の聴衆にむかつて別れの言葉を発した。

「皆さん——ここに私の年来の試みを閉じるにあたり、何ほどの  
胸の痛みもないと申すならば、私はまことにいいかげんな人間であ  
り、猫っかぶり、また冷血漢でありましょう。……さて、このまば  
ゆい燈明のもとから、今や私は永久に立ち去ります。皆さんへの心  
からの感謝と、敬意と、うるわしい別れの思いをこめて」<sup>(34)</sup>

これより三月足らずのうちにディケンズは急死して、ウェストミ  
ンスター寺院に葬られたが、その葬儀の日に配られたカードには、  
ディケンズ公開朗読の最後の言葉、「このまばゆい燈明のもとから、  
今や私は永久に立ち去ります」の一句が記されていた。

註

- (1) Charles Forster Kent, *Charles Dickens as A Reader*, Biblio Bazaar (2007) pp.23-25.
- (2) これは結婚届に署名した者の数に基づいた数値なので、署名を離れてもれば広く読み書きがなされていたものか正確にはわからない。R・D・マルティンが、十九世紀前半の識字率の向上には田舎を離れるものがあるという解を述べている。Richard D. Altick, *The English Common Reader*, Ohio State University Press (1998) p.172.
- (3) Malcolm Andrews, *Charles Dickens and His Performing Stages*, (Oxford University Press (2006) p.54. 但し、最後の一作「サイケンス・ナンシー」だけは別に検討する必要がある。
- (4) ナイケンスの最初の提案は、労働者は無償で招待されたことについて述べられている。 *Letters* (7January, 1853)
- (5) K.J.Fielding (ed.) *The Speeches of Charles Dickens*, p.166.
- (6) Philip Collins, *Charles Dickens, The Public Readings*, "Introduction" xxvi. 朗読を回してやる演目の一覧は上掲 Andrews, Appendix 参照。
- (7) Philip Collins, "Dickens' Public Readings," *Dickens Studies Annual*, Vol.3, pp.194-195.
- (8) Andrews, p.42.
- (9) Collins, "Dickens' Public Readings", p.185.
- (10) 「灯台」の上演については西條隆雄「ナイケンスの演劇活動」甲南大学紀要(二〇〇一年) またナイケンスの素人演劇全般については、同氏の「ナイケンスと素人演劇活動」『ナイケンス・フォーラム』日本文芸年報』第28号(二〇〇七年) 参照。
- (11) Thomas Wright, *The Life of Charles Dickens*, 40-52 註 2-4 Claire Tomalin, *The Invisible Woman* 参照。
- (12) Collins 第十八回と著者 Andrews 事前掲書巻末に十七回の英善朗読を示している。

- (13) *Speeches*, p.264.
- (14) 晩年の「ドクター・マリゴールド」は、事実これぐらいのリハーサルを行ったようだ。また、朗読リハーサルにエレン・ターナンがアドヴァイザー役を務めたらしいと、ドクター・マクロイドは推論している。Peter Ackroyd, *Dickens*, p.379.
- (15) 台本カリジナルの55-56は、Borg (New York Public Library) や Suzanet (The Dickens Museum, London) の二大コレクションに収められている。
- (16) Andrews, p.235.
- (17) Collins, *Charles Dickens The Public Readings*, pp.215-216.
- (18) 荒井良雄「ナイケンスの『公開朗読台本』研究」駒澤大学学部研究紀要・第五十三号「七十一ページ」。
- (19) Michael Slatyer, "The Bastille Prisoner, A Reading Dickens Never Gave", *Etudes Anglaises*, 7, xxiii (1970).
- (20) 荒井良雄「七十四ページ」。「ナイケンスは…関連性のないエピソードを組み合わせた台本には、聴衆を最後まで引っ張って行く一貫性のあるドラマチックな構成力と迫力と魅力に欠けていると判断したからかも知れない」と荒井氏は述べている。
- (21) ナイケンスは早くも一八六三年に、ナンシー殺しの場面を一人で朗読することになった。 Collins, *The Public Reading*, p.465.
- (22) Andrews, p.142.
- (23) Elnyn Williams, "Dickens and Theatre", *Charles Dickens: A Centenary Volume* (ed. L. W. F. Tomlin) Weinfield & Nicolson, 1969.
- (24) Raymond Fitzsimons, *The Charles Dickens Show*, pp.55-56.
- (25) Dolby George, *Charles Dickens as I knew Him*, Ch.vi-xi.
- (26) *Ibid.*, pp.301-302.
- (27) Kate Field, *Pen Photographs of Charles Dickens's Readings: Taken from Life*, Trubner & Co., James R. Osgood & Co., (1871) p.141.

- (28) James T. Fields, *Yesterdays with Authors*, University Press of the Pacific (2001, reprinted from 1877) pp.193-194.
- (29) Kent, pp.176-177.
- (30) Philip Collins, "Sikes and Nancy' Dickens's last reading", *Times Literary Supplement* (11 June 1971).
- (31) Dolby, pp.387-388.
- (32) *Ibid.*, p.408.
- (33) *Ibid.*, p.413.
- (34) Dolby, pp.448-449. 最後の公開朗読が行われた當年三月の時点で、ケックスは終りを告げても、作家、ディケンズはまだ健在という彼の強い意志がうかがえる。